

愛媛・大分交流 市町村コラボ企画

豊平交流

愛媛・大分両県の自治体同士でお互いの地域の魅力を紹介し合う取り組みを行っています。豊予海峡を挟んだ海の方こうに目を向けてみましょう！（次号は伊方町です）

1 かまぼこ板に描かれた絵が1万2000点 第26回全国「かまぼこ板の絵」展覧会



第26回展 大賞
「一歩前に」
日野 勉美

今年で26回目となる全国「かまぼこ板の絵」展覧会。食べ終わった後のかまぼこ板をキャンバスに使用するユニークな公募展です。国内外から寄せられた、およそ1万2000点の作品を展示します。

館内にはかまぼこ板の絵体験コーナーもあります。

- 会期** 9月11日(土)～4年2月13日(日)
午前9時～午後5時(毎週火曜日休館。祝日の場合はその翌日)
- 場所** 西予市立美術館ギャラリーしろかわ(西予市城川町下相680)
- 入館料** 大人420円他。団体割引あり
- 問** ギャラリーしろかわ ☎0894-82-1001



愛媛県西予市

ギャラリーしろかわのホームページはこちら▶



2 被災した野村地区のシンボル 復興と相撲の拠点「乙亥会館」

野村地区にある乙亥会館は、両国国技館を模した外観で、160年以上続く「乙亥大相撲」の会場として利用される野村地区のシンボルです。この施設に隣接する一級河川の肱川が平成30年7月豪雨災害時に氾濫。施設には濁流が押し寄せ、2階まで浸水しました。

復興の拠点として

昨年復旧した乙亥会館内には、平成30年7月豪雨災害を風化させず、次世代に引き継いでいくための災害伝承展示室を設置。相撲だけでなく、復興の拠点として活用しています。

災害語り部と一緒に災害伝承展示室を見学できます

災害語り部とは災害伝承展示室などを案内するガイドのこと。全員が平成30年7月豪雨災害を経験しています。

「事実を知り、学び合い、備えの先に命を守る。」災害伝承展示室のテーマです。語り部が語る実体験に耳を傾け、災害のことを学んでみませんか。

詳細は市ホームページをご覧ください。

問 乙亥会館 ☎0894-72-1006

西予市のホームページはこちら▶



復旧した乙亥会館



乙亥会館内の災害伝承展示室をガイドする語り部(写真右)

※上記の記事は西予市が作成しました。内容の詳細については政策企画部政策推進課 ☎0894-62-6421 までお問い合わせください。

市民図書館からのお知らせ

マイセクション ～あなたの一冊を教えてください～

自分が読んだ本をおすすめの本として紹介しませんか。おすすめ理由や本への思いをカードに記入してください。

募集期間：9月15日(水)から1カ月間

場所：市民図書館2階 受付カウンター
※選ばれた本は図書館職員がラッピングし、カードを添えて展示します。

大人のための朗読会

無料

今回のテーマは、秋の夜長に読みたい名作です。

日時：10月7日(木) 午後2時～3時

場所：市民図書館2階 会議室

定員：20人(要事前申込み)

申込み：直接または電話で、9月1日(水)から市民図書館へ。

問 市民図書館 ☎576-8241

このコーナーでは、市民図書館が所蔵している新刊を紹介します。



ようこそみんなの世界へ

モイラ・バタフィールド：文 ハリエット・ライナス：絵
化学同人

幼い頃からさまざまな場所に住み、大人になって世界中を旅した作者が、言葉や家、服装の他に、その国の代表的なケーキ、動物の鳴き声など、盛りだくさんの“ちがひ”や“同じこと”について紹介しています。世界の広さを感じられる絵本です。

コップひとつから始める ゆる～い野菜づくり

やさしい畑編集部：編
家の光協会

キッチンで気軽に野菜づくりができるコップ栽培。育てる手間も簡単で、欲しいときに少しずつ収穫することができます。葉物野菜は、根が付いていればリサイクル栽培ができるので、まずは手軽なりサイクル栽培で野菜づくりをしてみませんか。



人権・同和教育シリーズ 513



人の生き方を考える

大切にしたい思い

わたしは中学校の教員です。「子どもの心に寄り添うことができる教員でありたい。そのために、子どもにしっかりと向き合いたい」という思いを強く持っています。それは、ある友人との出来事があったからです。

友人は、付き合い合っている相手から差別部落出身という理由で周囲から結婚を反対され、踏み切れないでいると打ち明けてくれました。わたしは、部落差別について学んではいたはずなのに、その時は、「なんか、悔しいよね…」と言うのがやっとだったのです。

その後、友人は結婚したのですが、今でもその時の事を思い出して後悔しています。もっと話を聞くことができたのではないかと、もって差別について一緒に考えることもできたのではないかと。そして、友人の思いに向き合えていなかった自分、部落差別について分かってはいるつもりになって

わたしの今の思い込みが付きつたのです。この事がきっかけで、わたしはもう一度学び直すことにしました。

学びを深める中で、差別に向き合っていないことが、差別を残してしまっているのではないかとという考えが浮かんできました。そして、差別を受けている人たちが声を上げることができない現実を知るたびに、わたしは以前自分が出会った子どもたちのことを振り返るようになりました。それから、今まで以上に「子どもたちに本当に向き合っているのか」と自分自身を見つめ直しながら、子どもたちの前に立つようになったのです。

ある日、クラスの生徒が「先生、わたし、実は…」と相談してきました。その時、わたしに打ち明けてくれたあの友人の姿が思い浮かびました。この生徒の心の中にある思いは、あの時の友人と同じかもしれない。「ゆっくり話を聞いてもいいかな？」わたしは隣に座って、話を聞き始めました。

自分の身近に、差別で苦しい思いをしている人がいるかもしれせん。そういう思いをしている人がいると、想像してみませんか？それが、誰もが安心して暮らせる社会へとつながるのではないのでしょうか。